

清水好子氏著「源氏物語論」

本書は、第一章「いづれの御時にか」において、この冒頭表現が、当時の読者にどう印象されたかについて、十一節を設けて詳論し、源氏物語の基本的性格に迫っている。

女性仮託の土佐日記をはじめ、かげろふ日記、枕草子、紫式部日記、歌合仮名日記、私家集（女流家集）など仮名文の実録が、年号年代を記入していないこと、男子公卿の日記とその点で異なる態度を示していることを明らかにされた。すなわち、「年号年代を記入しない、歴史からは切りはなされた世界に入りこむことが、ひとつの文学的な女性的な型となりつゝあったらしいことを」看取されたのである。

「いづれの御時にか」という不定な言い方は、かような年号年次についての女性の対処の仕方、意識のあり方などからして、そのころの風を伝えるものだと推考し、そしてそれが、明白な事実を背後にしての技巧であること、仮名文——女性の家集、ことに歌物語の体裁をとるもの——における技巧として理解されていたのではないかということをも、順集、重之集、長能集などによってさぐられた。

源氏物語は「いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに……」と帝の御代について、歴史的時間について疑問の形で

森 一 郎

出すことによつて、じつは、伊勢集や長能集、あるいはかげろふ日記のような実録がそれをしたときと同様な、背後に実在の歴史を踏まえて語り出しているのだ、この話は事実なのだ、という印象を読者に与えはしなかつたか（本書六一頁）という結論がかくて示されたのである。

従来も、源氏物語の事実めかず技巧については説かれているが、「いづれの御時にか」という語り出しからして、事実だという印象を読者に与えたという本書の論説は、あくまで新説である。

従来、竹取、うつばなど、物語の冒頭表現における位置づけがなされ、わずかに伊勢集、長恨歌との連関が考えられたのにくらべて、日記、家集など、仮名文の「年次記載の意識と方法」を広く深く実証的にさぐられたとりくみ方は、まったく本書の新視角であり、功績である。

文獻学的実証主義の力の及ぶ限り、源氏物語の「いづれの御時にか」という語り出しに新しく詳密な歴史的具体性を賦与した本書の論説の意義は画期的である。

第二章は「遣地」であるが、以下、章を改めてあつても、この準

捷の方法を追求されていると見られるので、だいたい一括して見ることとする。

源氏物語のク事実めかす技巧々としてこの「準拠」のことは従来もとりあげられている。が、本書は単に、事與らしく見せることによって事與と興感させる興味をねらったものとするにとどめず、過去の實在の人物、事件を思い浮べさせることによる作者の意圖、歴史的政治的世界への傾斜という作者の才能の本質に迫っているのである。

したがって、本書の圧巻は、この独自の準拠論にあると思う。

河海抄が「物語の時代は醍醐朱雀村上三代に准ずる歟、桐壺御門は延喜、朱雀院は天慶、冷泉院は天曆、光源氏は西宮左大臣、如此相当する也」と述べるいわゆる準拠論は、虚構にもとづく作品の世界と史実との符合を詮索する中世的理解として、これを排斥した宣長の説の影響下において、ほとんど無視されてきた。

山田孝雄博士の「源氏物語の音楽」が、この準拠論に検討を加えるべき示唆を与えたが、近時、この準拠論を正しくとりあげようとする論説が、特に「註釈は、河海抄に止めをさす」と言われる玉上博士をはじめとして諸家によってなされはじめた。本書の著者、清水好子氏もその一人で、河海抄への傾倒よりは一途なものと違ってよく、事実、本書は「河海抄に導かれて」（本書、跋文）成ったと言われるのである。

河海抄の言う源高明準拠説を中心に、古注の諸説を精細に吟味されたが、高明が、時代とも、彼を生かした舞台ぐるみ捉えられていることを重視し、高明準拠説の論拠をきざみあげ、延喜天曆という皇代に参画する一世源氏の、理想の人物の生涯というところに、

高明準拠論の視点をしぼられた。

さて、時代を、延喜天曆という理想の時代——聖代——に設定し、理想の人物、光源氏を描いたことに対し、作者の理想主義を見出されるのであるが、特に、光源氏の須磨退居を周公東遷に比した譬き方は、理想の人物、光源氏の像をきざみあげるのに中国古代の聖人を理想させるようにしていることに「作者のなみなみならぬ理想主義をみる」と言われる。著者は、かかる考えを導いた河海抄の「周公に比するか」との指摘を高く評価されるのである。

須磨退居のことは周公東遷にならない、部分的に行平兼平菅公を想起させ、屈原をも引用した。

だから、いわゆる高明準拠ということとは、帝權盛んなりし聖代の一世源氏であること、一世源氏元服としての光源氏元服のときなどに連想されたのであって、須磨退居のばあいは、左遷という点ではケースは似ていても準拠とすべきでなく、その自発的隱志、という点などから、断然、周公旦に準拠を求めたとすべきなのだとされているごとく、この周公旦を準拠することについて阿部秋生博士の詳説がある。しかし、本書には、断然として周公旦準拠にひきまわすべし論の展開があり、自発的隱志（これは多屋頼俊博士の説に賛同されている）を論拠として詳説されており、おおむねは阿部博士と同様ながら、論旨は一途であり強い調子となっている。

準拠とモデルとの違いということが期せずして明らかにされてもいるのであって、準拠というのは、過去の史実の連想によって虚構の物語と正史とが同じ次元に並び、正史ならざる史実だとして享

受する説者を予想する、源氏物語独自の方法、作風なのである。

河海抄など古注が、史実に準拠をさぐろうとするのは、源氏物語の書き方がそうさせたのであって、源氏物語の作風の独自性をつくものなることを論じ、準拠ということをも、源氏物語の独自の方法、作風として把握し、精細に解明されたところに本書の眼目がある。

本書は、準拠の方法が、作者が自覚的に、意識的にとりあげた方法——技法——であるとの見地に立って、その文学的達成の解明を試みているが、準拠と写実性の結びつきを説いた一節は、なかでも著者のこまやかな眼が光っているところで、従来の著者の面目がそのままに示されているところだといえよう。

史上実在の人物や事物を連想させる手法は、源氏物語の写実性として結びついており、人物の動きの必然が、現実世界のたとえば具体的な場所と場所の因果関係などによって印象されるようになっていっているというわけである。人物が、作者の都合のよいように動く非現実性を捨て、人物の動きを現実世界の時空の中にはっきり規定することにによって必然性をかちとったわけである。かような意味において、準拠の方法は、源氏物語の写実性に参与するという論述には、著者の文学的力量がまったくさえわたっている。

本書は、著者の従来の論文の趣きからは、かなり大きな飛躍が印象されるのであるが、こうした史証的な本書の内容にも結局は著者のそうした資質がこまやかにほらいているのであった。

準拠の方法を追求した本書は、源氏物語の技法論と言うべきかと思ふが、著者は「作中人物や事件を史上実在のそれとないませる、過去の史実を連想させずにおかぬような、史上の前列に倣って書く

方法——準拠の方法——こそ、じつは歴史的・政治的世界をとりあげずにはいられなかった彼女の才能の本質的な傾向、したがって源氏物語の基本的な性格と不可分の表現手段であったのだ」と、この準拠の方法に源氏物語の独自性を証しされた。

こうした「歴史への傾斜」に「栄花物語への道」を見出され、日本文学史の上での源氏物語の位置づけに新しい提言をも試みているのである。

源氏物語のク政治々への関心、ク政治々の把握、認識は本質的だと思われる。

「物のあはれ」の一語でかたづけられてきた感ある源氏物語への認識は大きく交改されねばなるまいと思ふのである。

本書の提言に賛意と敬意を表したいと思ふ。

ただ一言希望を申し添えるならば、「栄花物語への道」もさることながら、やはり「大鏡への道」を詳説してほしいと思ふものである。「紫式部の儒教的な理想主義を見ずにはいられない」著者、「栄花物語と源氏物語を区別するものはこれなのである」とされる著者は、大鏡への道を十分知っていらっしやるはずである。

栄花が模した以上に、大鏡は源氏物語に学んでいると思われるが、栄花は女流（女房）の筆（通説）とのお考えから、本書では、その受けつぎを特に重視されたのであろう。栄花の側からの詳しい考説も期待されるであろう。（塙書房刊——昭和四十一年一月十五日発行、五三〇円）

（昭和四十一年二月十五日稿）

——甲南女子大学助教——